ウマの第6頸椎関節突起の離断性骨軟骨症

競走馬総合研究所病理研究室出題　　**第20回獣医病理学研修会標本No.316**

動物：ウマ（競走馬），サラブレッド種，3歳6ヵ月齢，北海道産，繋養地茨城県。

臨床的事項：2歳時，競馬場へ入厩し，2歳6ヵ月齢時，左橈側手根骨骨折を発症した。その他，特記すべき既往症もなく調教が行われてきた。出走経験は3歳5ヵ月齢時初出走で5回の出走であった。最終出走は12頭中12着で入線直後突然死となった。病理解剖学的に急性肺充血並びに出血と診断された。

頸椎の主な肉眼所見：第3及び第6頸椎後関節突起並びに第7頸椎前関節突起は左右不対称で関節軟骨の粗糙化を示した。特に第6頸椎の左後関節突起は右側に比し大きく，関節唇尾側部において1.0×0.8×0.5cm大の遊離性の円錘形の小骨体が骨体中に埋没しているように見えた(図1矢印)。円錘形の小骨体の底面は関節突起関節面と同一面にあり，頂点は海綿骨質に向い，策状結合織で関節突起の骨体と連結していた。この小骨体の隣接領域における関節突起軟骨は灰白色で菲薄化及び亀裂形成を示した。

第6頸椎左後関節突起の組織所見：小骨体は軟骨あるいは結合織で囲まれた海面骨体であった(図2HE染色×5.2)。小骨体の底面(関節面)及び側面は硝子様軟骨及び膠原線維から成り，側面では水腫性変化が強かった。小骨体の頂点は関節突起本体と小血管を伴なう膠原線維で連結していた。小骨体内部は関節突起骨体の組織と同様な海綿骨質であった。小骨体周囲の関節突起骨体において，関節軟骨は軟骨膜の水腫性肥厚及び軟骨膜から軟骨下骨組織に及ぶ線状亀裂形成，軟骨・骨接合部における軟骨及び骨組織の巣状変性・壊死(図3，HE染色×78.2)であった。その他，小骨体周囲の関節絨毛には小血管の水腫性肥厚が見出された。第1頸髄～第2胸髄に至る脊髄の検索では著変なかった。

従来から頸椎の骨病変は腰痿(wobler)との関連で強調されている(Rooney,Whitwell,Reiland等)にもかかわらず，本症例は腰痿症状が全く無かった。本症例の第6頸椎関節突起の病変は人・獣医界で古くから知られている離断性骨軟骨症(osteochondrosis dissecans)と診断された。離断性骨軟骨症の病理発生については種々論議のあるところであるが，小骨体周囲の関節突起骨体の病変から推して，離断した小骨体の成り立ちには関節突起辺縁の骨及び軟骨の変性・壊死変化と軟骨性化骨が関与していたものと考える。また変性・壊死変化の発生には骨軟骨接合部の局所循環障害が関連していたであろう。